

## 古代語の「ての」について

著者	菊池 そのみ
雑誌名	筑波日本語研究
巻	23
ページ	113-134
発行年	2019-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00154658">http://hdl.handle.net/2241/00154658</a>

# 古代語の「ての」について

菊池 そのみ

キーワード：「ての」、古代語、和文資料、連体化、連体修飾

## 要 旨

本稿は古代語（上代日本語、中古日本語）における「ての」（「活用語連用形＋て＋の＋名詞」）の形式について用例を整理し、古代語における活用語の連体形による連体修飾との比較と現代語における「ての」の形式との比較とを実施し、以下の2点を明らかにした。まず、古代語における「ての」は時を表す副詞節（「AてのB」）となる場合に異なる2つの時点をつなぐ働きをするという点で活用語の連体形による連体修飾とは異なる時間関係を表す場合のあることを明らかにした。次に古代語と現代語との比較から現代語の「ての」には動作性名詞と非動作性名詞とがどちらも下接するのに対して古代語の「ての」には非動作性名詞のみが下接することを指摘した。更に「ての」による連体化には下接する名詞によって「連用修飾節の連体化」と「補文の連体化」との2つのタイプがあることを示し、これに照らすと現代語の「ての」は2つのタイプを持つのに対して古代語の「ての」は「補文の連体化」のみを持つことを明らかにした。

## 1. はじめに

本稿では(1)、(2)のような古代語における「ての」（「活用語連用形＋て＋の＋名詞」）の形式について取り上げる<sup>1</sup>。この「ての」の形式は(3)、(4)のように現代語においても見られるものであり、現代語の「ての」については姫野（1983）の研究をはじめとして用法の整理や下接する名詞（被修飾語）の分類に基づいた分析が実施されてきた。

---

<sup>1</sup> 本稿では上代語と中古語とを合わせて「古代語」と呼ぶ。

それに対して古代語の「ての」を中心に扱った論考は管見の限りでは見当たらない<sup>2</sup>。

- (1) 青柳梅との花を折りかざし飲みて後は散りぬともよし [能弥弓能と知波]  
(萬葉集・巻第五・821・満誓沙弥)<sup>3</sup>
- (2) 河原の大臣の身まかりての秋、かの家のほつりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみていれたりける  
(古今和歌集・巻第十六・哀傷歌・848・詞書)
- (3) 一年間休んでの予定通りの復活で…… (朝日 83年1月) (姫野 1983:30(3))
- (4) 新瀉の実家へ行っての帰り、スピードの一斉取り締まりにあいました。  
(朝日 81年8月) (姫野 1983:31(5))

以下では古代語の「ての」に関連する先行研究を整理し、本稿の目的を示す。

### 1.1. 先行研究の整理

ここでは古代語の連体助詞の「の」を扱った研究のうち、特に連用を担う語や句に「の」が下接することによって連体を担う語（または句）へ転化する働きについて言及している森野（1973）と小田（2015）とを取り上げる<sup>4</sup>。

---

<sup>2</sup> 「ての」を含んだ個別の形式の検討として中世の抄物資料に見られる「～テノ用ハ」を扱った小林（1995）があるが、本稿の議論と直接に関わるものではない。

<sup>3</sup> 先行研究の引用や用例の引用に当たって縦書きを横書きに改めた箇所がある。また、特に断らない限り、先行研究の引用における下線や傍点は原文に従って施したものであり、先行研究中の用例の出典は先行研究に従った。なお、用例の引用における下線は筆者が施したものであるが、用例の表記は稿末に示した調査資料に拠ることとし、用例末尾の丸括弧内に資料名、巻名などを記した。『萬葉集』の用例については『新編日本古典文学全集』の読み下し文を引用し、用例末尾の亀甲括弧内に同じく原文を一部併記した。

<sup>4</sup> 古代語における助詞「の」に関する研究は此島（1966）や今泉（1969）をはじめ、多く見られる。先行研究を踏まえると古代語の「の」は以下の(A)のような主格の場合と(B)のような連体格の場合とに大別し得る。また、この連体格の「の」による「NのN」の形式は現代語同様、様々な関係で結ばれ得ることが指摘されている。本稿では後者の連体格として働く「の」を「連体助詞の「の」」とする。なお、主格の「の」については本稿では扱わないが、吉田（2016:183）の整理によれば、古代語では単文や主節の主格は基本的に無助詞によって示される一方で「連体修飾部」や「条件句」などの従属節の内部では上代から「主格と見られるノ・ガ」が用いられていたとされる。詳しくは野村（1993a・1993b・1993c）などを参照されたい。また、現代語の連体助詞の「の」については主に丹羽（2010a・2011）を参考としている。

(A)ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶせかりけり [雨之落日]

(萬葉集・巻第四・769・大伴宿禰家持)

(B)梅が枝に鳴きて移ろふうぐひすの羽白たへに沫雪そ降る [鶯之翼] (萬葉集・巻第十・1840)

まず、個別の格助詞の機能について記述した森野（1973:120）は「〈格言＋ノ・ガ＋体言〉のケースに限らず、特に〈ノ〉については、連用関係でのみ用いるものを連体修飾語に転化させる役割をはたしたり、すでに文として成立したものを改めてより大きな文の構成成分として包摂し、連体修飾語として機能させたり」することを指摘し、(5)、(6)の例を挙げている。(5)は副詞「かねて」に下接した例であり<sup>5</sup>、(6)は文相当の「忘れじ」に下接した例である。いずれも「の」が下接することによって後に続く名詞（「あらまし」、「行末」）の連体修飾語となっている。また、森野（1973:121）は他の格助詞と「の」との承接については「現代語では活発だが、古典語では、特に中古まででは、まだ微弱であり、例はすくない」とした上で(7)の例を挙げている。

- (5) かねてのあらまし（徒然草・一八九段）（森野 1973:120①）  
 (6) 忘れじの行末まではかたければ今日を限りの命ともがな  
 （新古今集・一一四九）（森野 1973:121②）  
 (7) 昔よりのことをば、いかがせむ。（蜻蛉日記・上）（森野 1973:121③）

森野（1973:121）は連用格の関係を表示する格助詞（「より」、「から」、「まで」など）に「の」が下接することにより、「その句全体をまとめて連体格に転じさせるが、成立過程としては、おそらく、このように表現される一つ手前には、まず、普通の〈連用修飾語＋述語〉構文の表現が、心裡に形成され、それをもとに短絡されたこの表現が、表層にあらわれたものと考えられよう」と述べている<sup>6</sup>。

次に小田（2015）は古代語の「の」は活用語の連体形を受けないことを確認した上で(8)、(9)、(10)のような例を挙げ、例外的に「の」が句を受ける場合を指摘している。(8)はモダリティの助動詞「む」、(9)は願望表現の終助詞「ばや」、(10)は反実仮想を表す「ましかば」にそれぞれ「の」が下接している。これらについて小田（2015:329）

<sup>5</sup> 森野（1973:121）はこの「かねて」については「語源はともかく、ここでは副詞として処理してよい」と述べている。

<sup>6</sup> 森野（1973:121）は(7)の例について言えば、「昔よりありしこと」→「昔よりのこと」のような短絡化を考えたい」としている。また、これに関連して小田（2015:333）は連用格の格関係を表示する格助詞のうち、中古語までは「への」の形式が存在しなかった可能性を示唆し、「の」だけで現代語における「への」の意を表していたことを指摘している。以下の(C)、(D)は現代語においては「への」で表される意を持つものである。

- (C)少将の返事には、「……」と言へば、少将いとほしく（落窪）（小田 2015:333(3)）  
 (D)十月に朱雀院の行幸あるべし。（源・若紫）（小田 2015:333(5)）

は「句を名詞化して受けたものである」と述べている<sup>7</sup>。

- (8) [君や来む我や行かむ] のいさよひに (古今 690) (小田 2015:329(1))  
(9) わが身つらくて、[尼にもなりなばや] の御心つきぬ (源・柏木)  
(小田 2015:330(5))  
(10) めぐりあふけふの御法の薙にも [あらましかば] の昔をぞ思ふ (新千載 904)  
(小田 2015:330(11))

更に小田 (2015:330) は前掲の例に加えて「の」が「て」を受けることがある」と指摘した上で以下の 4 例を挙げており、これらの「～て」句も名詞相当と考えられる」と述べている<sup>8</sup>。

- (11) 飲みて後は (万 821) (小田 2015:330(12))  
(12) 女宮に物語など聞こえ給ひてのついでに (源・浮舟) (小田 2015:330(13))  
(13) 大輔などが若くてのころ (源・東屋) (小田 2015:330(14))  
(14) 成信の中将出家してのつとめて (公任集・詞書) (小田 2015:330(15))

## 1.2. 本稿の目的

前述の先行研究を踏まえ、本稿においては以下の 2 点を明らかにすることを目的とする。1 点目は古代語において「ての」による連体修飾と活用語（主に動詞、助動詞）の連体形による連体修飾との間にどのような差異があるかを明らかにすることである。先行研究では「ての」に関する検討が実施されていないため、まず、上代、中古の和文資料における「ての」の用例を概観し、整理する。次に前接する語、下接する語が

<sup>7</sup> ここでの「句」は文相当のものを含んでいると言える。なお、小田 (2015:i) は「奈良時代から文明年間頃（正徹の『草根集』を下限とする）までの文学作品に用いられている、いわゆる文語文（古典文、古文）」を対象としているため、本稿の扱う範囲と必ずしも一致するものではない。通時的な検討は今後の課題である。

<sup>8</sup> 小田 (2015:330) はこの他に接続助詞に「の」が下接する例として「つらきながらの頼みなるべき (続後撰 719)」を挙げている。また、他にも古代語の連体格について検討した竹内 (1987) や「まで」、「より」などの連用格に「の」が下接することを「格助詞の有形無実化」して挙げた柳田 (1987:117) などがある。なお、柳田 (1987) の「有形無実化」については渡辺 (1971) の議論を踏まえたものであるが、柳田 (1987) が古代語を対象としているのに対し、渡辺 (1971) は現代語を中心に扱っている。また、このような接続助詞に「の」が下接する形式や句（文相当）に「の」が下接する形式を連体修飾のタイプの 1 つに含めていない研究もある（塚原 1973 など）。

同じ場合に「ての」による連体修飾と活用語（主に動詞、助動詞）の連体形による連体修飾とを比較することによって両者の間の差異について検討する。2 点目は古代語における「ての」と現代語における「ての」との間にどのような差異があり、「ての」による連体化にどのような違いがあるかを明らかにすることである。この点については現代語における「ての」に関する先行研究を整理した上で古代語における「ての」と現代語における「ての」とを比較するという方法を採用する。

## 2. 調査結果の概観

本稿の調査では「ての」の用例を 85 例得た<sup>9</sup>。調査資料と資料ごとの用例数とは稿末の資料 1 に示した通りである。まず、「ての」に前接する形式を整理すると表 1 のように 8 通りの承接パターンがある<sup>10</sup>。現代語では形容詞は「ての」に基本的に前接しないが、本稿の調査では『源氏物語』に 1 例「若くてのころ」の例が見られた<sup>11</sup>。

表 1 「ての」に前接する形式

前接する形式	例	形式数	用例数
①動詞	流る、罷る、成る、上がる、濡る、生く、…	31	57
②名詞＋す	物語す	1	1
③動詞＋動詞	あひ見る、おくりおさむ、言ひ言ふ	3	6
④動詞＋補助動詞	かくれ給ふ、くだり侍る、つき給ふ、…	9	10
⑤動詞＋助動詞＋補助動詞	かくれさせ給ふ、過ごさせ給ふ、渡らせ給ふ、…	6	8
⑥動詞＋補助動詞＋助動詞	語り聞こえさす	1	1
⑦動詞＋補助動詞＋助動詞＋補助動詞	思ひ聞こえさせ給ふ	1	1
⑧形容詞	若し	1	1
計		53	85

<sup>9</sup> 「なべて」、「かねて」などの副詞に「の」が下接したものは除外している。また、『新古今和歌集』は中世初頭の成立とされているが、ここでは便宜的に調査対象に含めることとし、『竹取物語』、『土佐日記』、『篁物語』には「ての」の用例が見られなかったため、以下の分析対象から除外してある。用例の検索には『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』、『日本語歴史コーパス』(以下、「CHJ」)、『日本古典文学大系本文データベース』を使用した。CHJ ではキーを「品詞—大分類—助詞」かつ「語彙素—て」とし、後方共起条件の「キーから 1 語」を「品詞—大分類—助詞」かつ「語彙素—の」としてコーパス検索アプリケーション「中納言」(Ver.2.4.2)によって検索した。『日本古典文学大系本文データベース』では「ての」を文字列検索によって抽出し、『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』では語彙検索において「ての」を抽出し、該当するものを目視で確認した。

<sup>10</sup> なお、①の動詞については 31 語あるうちの「飲む」、「つく」、「言ふ」、「出づ」の 4 語が他動詞であり、残りの 27 語が自動詞であった。詳細は稿末の資料 2 に示した。

<sup>11</sup> ただし、丹羽 (2006:233 注 3) は形容詞が前接する場合でも下接する名詞が動作を表す場合(「叱られるのが怖くての {面会/仕事}」)には可能となることを指摘している。

次に「ての」に下接する形式について整理すると表2の通りである。

表2 「ての」に下接する形式<sup>12</sup>

下接する形式	例	形式数	用例数
①名詞	後、世、頃、名、秋、年、ついで、果て果て、朝、朝け、事、けはひ、元年乙巳、物語、際、心ばせ人、人、たのため、御宿世、ほど、床、あまり、御移香、花、程、十日、七月七日、濡れ衣	28	76
②名詞十の十名詞（十の十名詞）	年の秋、又の年、後の後の世、またの年の夏、よとせのはる、身のなげき	6	8
③句	仏の国などに来にけるにやあらむ	1	1
計		35	85

「ての」に下接する形式は時を表す名詞を含むものが多く、全て非動作性の名詞句と言える。特に「後」（のち）が22例と最も多く、次いで「世」が10例、「頃」が8例であった。表1に示した形式数の計が53であり、表2に示した形式数の計が35であることから「ての」に下接する形式の方がバリエーションが少ないということが読み取れる。特に韻文資料においては43例中、「後」が17例と最も多く、次いで「頃」が6例であり、全体の形式数は13に留まっている。それに対して散文資料においては42例中、「世」が7例と最も多く、次いで「後」が5例であり、全体の形式数は27である。このことから韻文資料では「ての」に下接する形式は偏っているのに対し、散文資料では下接する形式のバリエーションが多いことが窺える<sup>13</sup>。

- (15) おはしまし着きたれば、大門のもとに、高麗、唐土の樂して、獅子、狛犬をどり舞ひ、乱声の音、鼓の聲に、ものもおぼえず。こは生きてての仏の国などに来にけるにやあらむと、空にひびきあがるやうにおぼゆ。

(枕草子・第二六〇段)

<sup>12</sup> 表2における表記は便宜的なものであり、用例数を集計する際には漢字表記と仮名表記とを合わせている。例えば、表2における「後」とは漢字表記の「後」と仮名表記の「のち」とを合わせたものである。CHJを使用して検索した用例については漢字表記の「後」の読みをCHJの「語彙素読み」に従い、『新編国歌大観』や『日本古典文学大系本文データベース』を使用したものについては諸注釈書等を参考にして読みを便宜的に確定した。ただし、「ての」に下接する名詞として「アト」、「シリ」、「ウシロ」と読むべきと判断し、除外した用例は無い。平安和文の「アト」については井島(1996:196)が「(跡)の意味の少数の例しかない」としている。

<sup>13</sup> 「月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬかも」の歌は『萬葉集』、『古今和歌集』、『拾遺和歌集』にそれぞれ採録されているが、各和歌集に1例ずつ集計している。詳細は稿末の資料3に示した。

(15)は『枕草子』（第二六〇段）の例であるが、積善寺の大門のそばで高麗楽や唐楽が演奏され、獅子や狛犬が踊り舞い、乱声の音や鼓の声を聴いて興奮してしまい、何も感じられなくなり、「これは生きていながら仏の国に来たようだな」と思う場面である。ここでは「生きての」が「仏の国などに来にけるにやあらむ」という句（文相当）を修飾していると考えられるが、同様の例は他には見出せなかった。

最後に「ての」が形成する句が文中でどのように働いているかを整理する。ここでは「ての」に前接する形式を A、下接する形式を B として「A ての B」をひとつの句として捉える<sup>14</sup>。表 3 に「A ての B」に下接する助詞ごとに文中での働きを示した。

表 3 「A ての B」に下接する助詞と文中での働き

助詞	φ	は	に	の	も	と	ぞ	には	にも	
副詞句	23	8	11	0	3	0	3	1	2	
名詞句	2	6	1	10	1	2	0	1	0	
その他	0	0	0	0	1	1	0	0	0	
計	25	14	12	10	5	3	3	2	2	
助詞	を	をぞ	をこそ	こそ	ばかりの	しも	をも	とも	計	
副詞句	0	0	1	1	0	1	0	0	54	
名詞句	2	1	0	0	1	0	1	1	29	
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
計	2	1	1	1	1	1	1	1	85	

助詞ごとに見れば、「A ての B」に助詞が下接しない形式（表中の「φ」）で副詞句（いわゆる連用修飾成分）として働く(16)のような用例が 23 例（全体の 27.06%）と最も多い。また、(17)、(18)のように「は」や「の」が下接し、名詞句（主語句や述語句）として働く用例は 29 例見られた。なお、表 3 には示していないが、名詞句として働く 29 例のうち、(18)のように助動詞「なり」＋「けり」が下接し、いわゆる述語句となる例は 3 例のみであり、全て歌の用例であった<sup>15</sup>。

副詞句として働く用例が多いのは「ての」に「後」、「頃」、「年」のような時を表す

<sup>14</sup> 「A ての B」という表し方は現代語の「ての」に関する研究である丹羽（2006）を参考とした。

<sup>15</sup> 本稿の調査においてはこのように述語句となる例は少なかったものの、中世以降の資料における「ての」の用例を概観すると以下の(E)、(F)のような述語句の例が多くを占めるようになる。また、「～ニヨリテノ N」、「～ト存ジテノ N」などの形式は中世以降に見られることから現代語では「後置詞」（姫野 1983:29）と位置づけられるような形式化した表現の成立は中世以降であると見受けられる。これらについては稿を改めることとする。

(E)さまざまの芸能も、まづ心操ととのへてのうへのことなり。（十訓抄・巻十・七十三）

(F)仰のごとく此間方々のおふるまひは、いかひ事で御ざるが、是と申もめでたひみよでござるに依ての事で御ざる。（虎明本狂言集・そらうで）



名詞が下接する例が多いためである<sup>16</sup>。

- (16) 河原の左大臣の身まかりてののち、かの家にまかりてありけるに、塩竈といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる  
(古今和歌集・卷第十六・哀傷歌・853・詞書)
- (17) しばしこそ、忍ぶとも思さめ、つひには隠れあらじ、また、さだめて宮をしも疑ひきこえたまはじ、いかなる人か率て隠しけんなどぞ、思し寄せむかし、生きたまひての御宿世はいと気高くおはせし人の、げに亡き影にいみじきことをや疑はれたまはん、と思へば、ここの内なる下人どもにも、今朝のあわたたしかりつるまどひにけしきも見聞きつるには口かため、案内知らぬには聞かせじなどぞたばかりける。  
(源氏物語・蜻蛉)
- (18) 世中にしのぶるこひのわびしきはあひてののちのあはぬなりけり  
(後撰和歌集・卷第九・恋一・564・よみ人しらず)

### 3. 「ての」と活用語の連体形による連体修飾との差異

ここでは前述した調査結果を踏まえ、副詞節を形成する「ての」と活用語（主に動詞、助動詞）の連体形による連体修飾との間の差異について検討を試みる。

特に「春」、「秋」などの季節の名詞や「頃」、「後」などの相対名詞が「ての」に下接する場合を対象とし、時を表す副詞節を形成する場合について検討する<sup>17</sup>。例えば(19)は「(お酒を)飲んだ後は散ってしまってもよい」、(20)は「河原の大臣(源融)が亡くなられた年の秋」といった例であり、相対修飾を担っている。また、(21)は六条御息所の死霊が光源氏に対して恨み言を連ねている会話文であるが、「その(恨めし

<sup>16</sup> なお、「その他」には(15)に示した「生きての仏の国などに来にけるにやあらむ」に下接した「と」と以下の(G)に示す『萬葉集』における左注の場合が含まれている。

(G)命をし全くしあらばあり衣のありて後にも逢はざらめやも

一に云ふ、「ありての後も」[安里弓能乃知毛] (『萬葉集』・卷第十五・3741・中臣朝臣宅守)

<sup>17</sup> 「相対名詞」という用語は奥津(1974)によるものである。本稿における「相対修飾」は丹羽(2010b:97(13))の「主名詞となる名詞が、単独では意味的に自立しない関係概念を表し、修飾部分はその関係を補充するという連体修飾関係を相対(補充)修飾関係と呼ぶ。修飾部分は「名詞+助詞」による場合と連体節(=相対節)による場合とがある」という定義に従うものである。なお、これと似た概念のひとつに西山(2003)のような名詞の「飽和/非飽和」の区別があるが、これは主にコンピュータ文の議論において用いられるものであり、本稿とは直接に関わるものではないと考える。

いことの) 中でも特に生きていた世で、他の女性よりも(私のことを) お見下げになって捨てたことよりも…」という過去における継続を表していると言えるが、これは動詞のタイプによる違いであると考えられる<sup>18</sup>。

- (19) 青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし〔能弥弓能と知波〕  
(萬葉集・巻第五・821・満誓沙弥、再掲(1))
- (20) 河原の大臣の身まかりての秋、かの家のほつりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみていれたりける  
(古今和歌集・巻第十六・哀傷歌・848・詞書、再掲(2))
- (21) その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。  
(源氏物語・若菜下)

以下ではまず、(19)～(21)に挙げたような相対修飾の「ての」を対象として活用語(主に動詞、助動詞)の連体形による連体修飾との間の差異について「ての」に下接する名詞の一部を例として検討を試みる。なお、(22)、(23)のような「昔の」の意を表す「あがりての」、「のぼりての」については『日本国語大辞典第二版』の小見出しにも立項されており、動詞の意味に基づいた固定化した表現であると考え得るため、検討の対象から除外した<sup>19</sup>。なお、これらは(24)に示した「あがりたる世」という助動詞「たり」を用いた表現でも同様に「昔の世」の意を表している。

- (22) いはんや、多くの調べ、わづらはしき曲多かるを、心に入りし盛りには、世にありとあり、ここに伝はりたる譜といふものの限りをあまねく見あはせて、後々は師とすべき人もなくてなむ、好み習ひしかど、なほあがりての人には、

<sup>18</sup>『源氏物語』における「ての」の用例は 12 例中 6 例が(21)、後掲の(28)、(29)のように生死に関わる場面や出家に関する場面で使用されているという特徴がある。また、特に韻文資料の詞書においては「かくる」、「まかる」、「なくなる」などの語が「ての」に前接した死に関わる場面の表現が散見される。助詞である「ての」自体に生死に関わる特異な意味が付与されていたとは判断し難いが、特定の語との共起が固定化していた可能性は否定できない。

<sup>19</sup>『日本国語大辞典第二版』には「あが・る」の項の小見出しに「あがりたる[=あがれる]世(よ) 遠い昔。上代。上世。あがりての世。」「あがりての人(ひと) 遠い昔の人。上代の人。」「あがりての世(よ)」「あがり(上)たる世(よ)」に同じとある。また、「のぼ・る」の項の小見出しに「のぼりての世(よ) さかのぼつての世。昔の世。上代。のぼるよ。」とある。本稿の調査では「あがりての世」は 3 例、「あがりての人」は 1 例、「のぼりての世」は 1 例見られた。

当たるべくもあらじをや。

(源氏物語・若菜下)

- (23) 山井大納言殿、六月十一日ぞかし。またあらじ、あがりての世にも、かく大臣・公卿七八人、二三月の中にかきはらひたまふこと。希有なりしわざなり。

(大鏡・道長)

- (24) げに、はた明らかに空の月星を動かし、時ならぬ霜雪を降らせ、雲雷を騒がしたる例、上がりたる世にはありけり。

(源氏物語・若菜下)

### 3.1. 「ての」に特有の時間表示

まず、「ての」が活用語の連体形による連体修飾とは異なる時間関係を表す用例について示す。(25)、(26)はいずれも韻文資料の詞書の例であるが、「身まかる (=亡くなる) という事態が起きた年の秋」という時間関係を表している。つまり、「身まかる (=亡くなる) という事態」は当該の「秋」よりも前に起きた出来事であり、「身まかる (=亡くなる) という事態が起きたその年の秋」のように「その年の」などの語を補った解釈になる。実際に(27)のように「～ての年の秋」の用例も見られ、(25)、(26)の表す時間関係と同様であると考えられる。

- (25) 河原の大臣の身まかりての秋、かの家のほとりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみていれたりける

(古今和歌集・卷第十六・哀傷歌・848・詞書、再掲(2), (20))

- (26) ちち秀宗身まかりての秋、寄風懐旧といふ事をよみ侍りける

(新古今和歌集・卷第八・哀傷歌・789・詞書)

- (27) 中宮かくれたまひての年の秋、御前の前栽につゆのおきたるを風の吹きなびかしけるをご覧じて

(拾遺和歌集・卷第二十・哀傷・1286・詞書)

それに対して(28)、(29)のように同じく亡くなるの意を持つ「かくる」に助動詞「り」と助動詞「き」の連体形「し」とが下接した場合には後に続く名詞「春」、「秋」に起きた出来事を表している。

- (28) 「さまで思ひのどめむ心深きこそ、浅きに劣りぬべけれ」などのたまひて、昔よりものを思ふことなど語り出でたまふ中に、「故後の宮の崩れたまへりし春なむ、花の色を見ても、まことに『心あらば』とおぼえし。それは、おほかたの世につけて、をかしかりし御ありさまを幼くより見たてまつりし

て、さるとぢめの悲しさも人よりことにおぼえしなり。みづからとりわく心ざしにも、もののあはれはよらぬわざなり。（源氏物語・幻）

- (29) 「君の御母君の隠れたまへりし秋なむ、世に悲しきことの際にはおぼえはべりしを、女は限りありて、見る人少なう、とあることもかかることもあらはならねば、悲しびも隠ろへてなむありける。はかばかしからねど、朝廷も棄てたまはず、やうやう人となり、官位につけてあひ頼む人々、おのづから次々に多うなりなどして、驚き口惜しがるも類にふれてあるべし。

（源氏物語・柏木）

このように「AてのB」の形式における「ての」はAによって表された時点（(25)、(26)においては「身まかる」）とAとは異なる時点Bとをつなぐ役割をしているといえる。ただし、その2つの時点の関係はAが先に起こり、Bが後に起こるというものである<sup>20</sup>。

### 3.2. 活用語の連体形による連体修飾との差異が明確でないもの

続いて「ての」と活用語の連体形による連体修飾の示す時間関係との差が明確でないものの例を示す。(30)は「前坊がいらっしやらなくなった（＝お亡くなりになった）頃」の意であるが、(31)～(36)の例でも同様の時間関係を表している。古代語における時を表す表現については特に鈴木（2009・2012）、井島（2011）などに詳しいが、連体修飾節内のテンス、アスペクトについては明らかでない部分が多く、地の文、会話文、心内話文などの差異にも留意しつつ、これらの違いについては更なる検討が求められる。

- (30) 前坊おはしまさずなりてのころ、五節の師のもとにつかはしける

（後撰和歌集・巻第十七・雑三・1203・詞書）

- (31) かう語らひ、かたみのうしろ見などするに、中に何ともなくて、すこし仲あしうなりたるころ、文おこせたり。（枕草子・第八〇段）

<sup>20</sup> 「ての」に下接する名詞には「前」（まえ、さき）のといった語は現れない。これは「AてB」の場合に事態の起こる順序はA→Bであるという助詞「て」の性質によるものと考え得る。そもそも助詞「て」は山田（1908:398-399）において「複語尾」の「つ」の連用形とされたものであり、佐藤（1969:443）、進藤（1973:196）をはじめとしてこの説に立脚する立場はある程度定着しているように窺える。なお、古代語の助詞「て」に関する研究は山口（1980・1998）、近藤（2000・2007・2012）などに詳しい。

- (32) 宰相になりたまひしころ、上の御前にて、「詩をいとをかしう誦じはべるものを。『蕭会稽が古廟を過ぎし』なども、誰か言ひはべらむとする。  
(枕草子・第一五五段)
- (33) 所どころの大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちして荻の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かさせたてまつりたまふ。  
(源氏物語・少女)
- (34) かかる御ありさまをも、かの入道の、聞かず見ぬ世にかけ離れたうべるのみなむ飽かざりける、難きことなりかし、まじらはましも見苦しくや。世の中の人、これを例にて、心高くなりぬべきころなめり。よろづのことにつけてめであさみ、世の言種にて、「明石の尼君」とぞ、幸ひ人に言ひける。  
(源氏物語・若菜下)
- (35) 雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し絶えてわりなく思されければ、親のかふこはとほころせきものにこそとすもかたじけなし。  
(源氏物語・浮舟)
- (36) 宮の御とぶらひに、日々に参りたまはぬ人なく、世の騒ぎとなれるころ、ことごとしき際ならぬ思ひに籠りゐて、参らざらんもひがみたるべしと思して参りたまふ。  
(源氏物語・蜻蛉)

#### 4. 古代語の「ての」と現代語の「ての」との比較

続いて古代語の「ての」と現代語の「ての」とを比較する。まず、現代語の「ての」に関する先行研究を概観し、次に両者の違いについて指摘する。

##### 4.1. 現代語の「ての」に関する研究

「ての」について中心的に扱った研究のうち、ここでは姫野（1983）、茂木・森（2006）、丹羽（2006）を取り上げる<sup>21</sup>。

まず、姫野（1983:30）は「ての」は「て」形の持つ機能のうち、①推移・連続、②原因・理由、③方法・手段・状況の用法を持つと指摘している。それぞれの用法に該当する例として姫野（1983）の挙げた用例を(37)、(38)、(39)に1例ずつ示す。

---

<sup>21</sup> 他にも井口（1992）、許（2001）、スタラ（2009・2014）などの研究がある。

- (37) 一年間休んでの予定通りの復活で……（朝日 83 年 1 月）  
（姫野 1983:30(3)、再掲(3)）
- (38) 私たち一行に向けられる周囲の目が冷ややかだ。…やがて「フィンランド化  
発言」が伝わっての憤り、と知らされた（朝日 83 年 7 月）（姫野 1983:32(11)）
- (39) 山小屋に合宿して自炊、ヤブや雑木をかきわけての重労働だったが、もちろ  
ん報酬はなし。（朝日 81 年 8 月）（姫野 1983:35(22)）

また、「ての」は大部分が「～した+名詞」に言い換えられるが、「連体形の動詞と被修飾名詞の意味的関連が薄い場合、あるいは、連体節が底の名詞に対して内容を表すという関係になり、もとの連用修飾「～して」の意味とずれてくる場合」には、言い換え不可能か、言い換えると意味が異なる場合があると述べている<sup>22</sup>（姫野 1983:41）。

次に茂木・森（2006）は被修飾名詞を大きく「述語性名詞」と「非述語性名詞」に分け、「述語性名詞」を主要部とする「テノ名詞句」の用法として「付帯状況」、「継起」、「原因・理由」を挙げている。「非述語性名詞」については連体修飾の「外の関係」と関連づけ、「述語性名詞」に比べて「テノ名詞句」の生産性が低いことと「相対性」タイプの名詞も被修飾名詞になりうることを指摘した。「述語性名詞」と「非述語性名詞」とのどちらを主名詞とした場合も「テ節の事態と被修飾名詞の事態とは、継起的もしくは並行的な関係にあり、この関係が逆行すること」はなく、「テノ名詞句には、テ節の持つ時間的な展開が内包されている」とした（茂木・森 2006:151-152）。

最後に丹羽（2006:232）は「ての」に下接する名詞を「動作性の主名詞」と「非動作性の主名詞」とに分け、「AてのB」を「Bに内在的・付随的關係にあるAによってBを修飾するタイプ」と「相対補充を表すタイプ」（「非動作性の主名詞」のうちの相対名詞）とに大別している。前者には、AがBに内在する「背景状況」、「原因理由」、「方法」、「逆接」を表すものとAがBに付随する「様態」を表すものとがあるとし、

---

<sup>22</sup> 姫野（1983）は「窓ガラスが破れ飛んで傷害が生じる」、「窓ガラスが破れ飛んでの傷害」に対して「窓ガラスが破れ飛ぶ傷害」の許容度が下がること（＝「連体形の動詞と被修飾名詞の意味的関連が薄い場合」）や「見て楽しむ」、「見ての楽しみ」に対して「見る楽しみ」の許容度が下がること（＝「連体節が底の名詞に対して内容を表すという関係になり、もとの連用修飾「～して」の意味とずれてくる場合」）などを挙げている。この他にも「～してのことだ」という強調構文の場合と「～してこそこの」という意味を示す場合も同じ意味での言い換えが不可能だと指摘している。

後者は「時間性」を表し、修飾部の表す時間と主名詞の表す時間は「前―後」という関係にあると指摘した<sup>23</sup>（丹羽 2006:224）。

#### 4.2. 下接する名詞から見る「ての」による連体化の2つのタイプ

まず、古代語と現代語との「ての」の差異は下接する名詞のタイプにある。現代語では(40)、(41)のように動作性名詞、非動作性名詞ともに「ての」に下接する例が見られるのに対し、古代語では非動作性名詞のみが「ての」に下接する<sup>24</sup>。また、茂木・森（2006）は現代語の「ての」については動作性名詞に比べて非動作性名詞の生産性が低いことを指摘しており、この点で古代語と現代語とは大きく異なっている。

- (40) 一年間休んでの予定通りの復活で……（朝日 83年1月）  
（姫野 1983:30(3)、再掲(3)、(37)、下線は筆者）
- (41) それは、べつに深く考えての言葉でも、根拠のある忠告でもなかった。  
（沢木耕太郎『一瞬の夏』）（茂木・森 2006:142(10)、下線は筆者）

次に下接する名詞が動作性名詞であるか非動作性名詞であるかによって「ての」による連体化を「連用修飾節の連体化」と「補文の連体化」との2つのタイプに分け得ることを指摘する。

##### 4.2.1. 連用修飾節の連体化（「ての」＋動作性名詞の場合）

まず、被修飾名詞が動作性名詞の場合、現代語では(42)～(44)のような例がある。

- (42) 山小屋に合宿して自炊、ヤブや雑木をかきわけての重労働だったが、もちろん報酬はなし。（朝日 81年8月）（姫野 1983:35(22)、再掲(39)、下線は筆者）
- (43) 借金返済に追われてての無理心中（丹羽 2006:221(6)、下線は筆者）

<sup>23</sup> 「て」節の並列と修飾とに関しては加藤（2003）が「並列（非修飾）」と「修飾（非並列）」とを区別する立場を示しているのに対し、丹羽（2006:233-234）は「て」節を扱う限りはそれでもよいのだが、「ての」節は二つの動作の場合についても成り立つのであり、二つの動作の間の修飾関係というものを認める必要がある」としている。

<sup>24</sup> 茂木・森（2006:144-147）は「ての」に下接する名詞のうち、「[する]の後接を許すもの、もしくは動詞から派生されたもの」を「述語性名詞」とし、「[する]が後接せず、動詞の派生形でもない」ものを「非述語性名詞」としており、本稿ではこれらをそれぞれ「動作性名詞」、「非動作性名詞」と呼ぶ。なお、丹羽（2006）の「動作性の主名詞」、「非動作性の主名詞」も概ねこれに相当するものと言える。

- (44) (江川は) 中八日、疲れからのヒジ痛も休養で回復しての登板だった。  
(丹羽 2006:221(4)、下線は筆者)

これらは丹羽 (2006:222) が「「A ての B」が「A て B する」に対応する関係にある」と述べているように「の」を伴わない場合に連用修飾節の「て」節を想定し得るタイプと言える。(42)~(44)をそれぞれ「て」節に置き換えたものが(45)~(47)である。

- (45) かきわけて重労働する (42)に相当する連用修飾節の「て」節  
(46) 追われて無理心中する (43)に相当する連用修飾節の「て」節  
(47) 回復して登板する (44)に相当する連用修飾節の「て」節

以上のことから本稿では「の」を伴わない場合に連用修飾節の「て」節を想定し得るタイプを「連用修飾節の連体化」とする。このタイプは被修飾名詞が動作性名詞であり、本稿の調査範囲においては古代語の「ての」には見られないものである。

#### 4.2.2. 補文の連体化（「ての」＋非動作性名詞の場合）

次に被修飾名詞が非動作性名詞の場合、現代語では(48)~(50)のような例がある。

- (48) 四十歳を超えての子だけに可愛さは一入なのかもしれなかった（四十歳を超えてできた子）  
(渡辺淳一「花埋み」) (丹羽 2006:222(10)、下線は筆者)  
(49) ひたすら働き続けての定年。(ひたすら働き続けて迎える定年)  
(毎日新聞 2000.1.22 夕) (丹羽 2006:222(12)、下線は筆者)  
(50) その参内をおわっての午後、義昭は本圀寺の館に信長をまねき、信長のために祝賀の宴を張った。(司馬) (丹羽 2006:341(75)、下線は筆者)

(48)、(49)に示したように丹羽 (2006) は非動作性名詞であり、且つ相對名詞でない場合に用例の末尾に「ての」の前件部分と「ての」に下接する名詞との関係の解釈を活用語の連体形による連体修飾によって補っている。これは「の」を伴わない場合には下接する名詞に「する」を補って動詞として解釈し得ず、連用修飾節としての「て」節を想定すること自体が不可能であることに起因する。このように本稿では「の」を伴わない場合に連用修飾節の「て」節を想定し難いタイプを「補文の連体化」とする



25. このタイプは被修飾名詞が非動作性名詞であり、古代語ではこのタイプの「ての」のみが見られる。

#### 4.3. 古代語の「ての」と現代語の「ての」

前述の連体化の2つのタイプに照らして古代語の「ての」と現代語の「ての」とを比較し、表4に示した。

表4 古代語の「ての」と現代語の「ての」との比較

連体化のタイプ	名詞のタイプ	古代語	現代語
(A)連用修飾節の連体化	動作性名詞	×	○
(B)補文の連体化	非動作性名詞	○	○

また、個別の名詞を見ると(51)の「頃」は現代語においては内容補充として「～ての頃」を用いると不自然になると考えられ、名詞ごとに「ての」の形式の変化が想定される。このような個々の名詞の検討は今後の課題である<sup>26</sup>。

- (51) 前坊おはしまさずなりてのころ、五節の師のもとにつかはしける  
(後撰和歌集・巻第十七・雑三・1203・詞書、再掲(30))

## 5. おわりに

最後に本稿の結論と今後の課題とを述べる。

### 5.1. 本稿の結論

本稿では古代日本語における「ての」についてその用例を検討した結果、以下の2点を明らかにした。まず、古代語においては「ての」によって時を表す副詞節(「AてのB」)が形成される場合に異なる2つの時点をつなぐ働きをするという点で活用語

<sup>25</sup> 「補文」という用語は広く見れば、4.2.1で「連用修飾節」としたものをも含む概念であるが、ここでは「広義の「補文」のうち、連用修飾節ではない節」を便宜的に「補文」としておく。

<sup>26</sup> 現代語において「ての」に下接する名詞が非動作性名詞であり、且つ相対修飾でない場合に修飾の関係は内容補充であるのか、という点については更に検討が必要となる。(51)では内容補充の関係に「ての」が用いられており、その点で現代語と古代語とが異なっている可能性がある。

の連体形とは異なる時間関係を表す場合のあることを明らかにした。次に「ての」に動作性名詞が下接する場合を「連用修飾節の連体化」、非動作性名詞が下接する場合を「補文の連体化」とすると現代語の「ての」は2つのタイプを持つのに対し、古代語の「ての」は「補文の連体化」のみを持つことを明らかにした。

## 5.2. 今後の課題

本稿では上代語、中古語のみを対象としたが、中世語以降の「ての」についても稿を改めて論じる必要があり、これには「～よってのこと」、「～とってのこと」など「ての」を含んだ原因理由を表す形式の成立が関わっている。

また、連体化の2つのタイプについては「て」以外の助詞に「の」が下接する場合や句（文相当）に「の」が下接する場合についても更に検討し、古代語と現代語との体系的な差異について検討し得る余地のあるものである<sup>27</sup>。

## 謝辞

本稿は日本語学会第156回大会において口頭発表した内容の一部に加筆し、修正を施したものである。発表の際には多くのご助言を賜った。記して御礼申し上げる。

## 調査（引用）資料

- ・『日本古典文学大系』：『宇津保物語』、『篁物語』、『夜の寝覚』、『浜松中納言物語』、『狭衣物語』、『栄花物語』。検索には国文学研究資料館電子資料館『日本古典文学大系本文データベース』（<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>）を使用した（2018/10/5 閲覧）。
- ・『新編日本古典文学全集』：『萬葉集』、『古今和歌集』、『竹取物語』、『土佐日記』、『伊勢物語』、『平中物語』、『蜻蛉日記』、『落窪物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『堤中納言物語』、『更級日記』、『狭衣物語』、『大鏡』、『讃岐典侍日記』、『十訓抄』。検索には国国語研究所（2017）『日本語歴史コーパス奈良時代編』（2018/10/8 閲覧）、国国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス平安時代編』（2018/10/15 閲覧）を使用した。

---

<sup>27</sup> 現代語の「ての」に関わるいわゆる複合助詞の研究では山田（2002）、杉本（2014）などによって連用形、「ての」形、連体形の出現頻度が複合助詞によって異なることが指摘されている。例えば、「～に関しての N」には対応する形式として「～に関する N」、「～に関して V する」、「～に関し V する」があるが、「～についての N」に対応する形式として「～につく N」は不自然であるといった例がある。

- ・『新編国歌大観』：『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』。検索には「新編国歌大観」編集委員会（監）（2003）『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』（角川書店）を使用した。
- ・大塚光信（編）（2006）『大蔵虎明本狂言集翻刻註解』清文堂：『虎明本狂言集』。検索には国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス室町時代編 I 狂言』（2018/10/8 閲覧）を使用した。
- ・『日本国語大辞典第二版』（日本国語大辞典第二版編集委員会（編），小学館，2000年～2002年）。

## 参考文献

- 井口厚夫（1992）「「サラ金に追われての夜逃げ」型の連体構造」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 11—計算機用レキシコンのために（3）—』, 109-111, 情報処理振興事業協会技術センター。
- 井島正博（1996）「相対名詞または格助詞による時の副詞節」山口明德教授還暦記念会（編）『山口明德教授還暦記念国語学論集』, 195-224, 明治書院。
- 井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』, ひつじ書房。
- 今泉忠義（1969）「つ・の・が—格助詞〈古代語・現代語〉」松村明（編）『古典語現代語助詞助動詞詳説』, 321-335, 學燈社。
- 奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論』, 大修館書店。
- 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』, 和泉書院。
- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』, ひつじ書房。
- 許恵晴（2001）「「連用節＋ノ」用法についての一考察」『銘傳日本語教育』4, 130-148, 銘傳大學應用文學院應用日語學系出版。
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究—助詞史素描—』, 桜楓社。
- 小林千草（1995）「生キテノ用ハ—抄物の反映することばと実相—」『國語と國文學』72:11, 22-39, 東京大学国語国文学会。
- 近藤泰弘（2000）「中古語の複文構造の概観」近藤泰弘『日本語記述文法の理論』, 401-411, ひつじ書房。
- 近藤泰弘（2007）「平安時代語の接続助詞「て」の機能」『國學院雑誌』108:11, 174-183, 國學院大學綜合企画部。
- 近藤泰弘（2012）「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『國語と國文學』89:2, 49-60, 東京大学国語国文学会。
- 佐藤喜代治（1969）「て（で）—接続助詞〈古典語・現代語〉」松村明（編）『古典語現代語助詞助動詞詳説』, 443-448, 學燈社。

- 進藤咲子 (1973) 「接続助詞」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別日本文法講座 9 助詞』, 171-208, 明治書院.
- 杉本武 (2014) 「複合助詞の用法と機能」 前川喜久雄 (監) 『講座日本語とコーパス 6 コーパスと日本語学』, 48-68, 朝倉書店.
- 鈴木泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』, ひつじ書房.
- 鈴木泰 (2012) 『語形対照古典日本語の時間表現』, 笠間書院.
- スタラ・ティラウト (2009) 「連体化従属節を含む複合名詞句の構造」 『筑波応用言語学研究』 16, 61-74, 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域.
- スタラ・ティラウト (2014) 「連体化従属節と「NP ノ」の語順—従属節の文らしさに注目して—」 『筑波応用言語学研究』 21, 56-69, 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域.
- 竹内美智子 (1987) 「古文における連体格」 山口明穂 (編) 『国文法講座第三巻』, 71-115, 明治書院.
- 塚原鉄雄 (1973) 「修飾語とは何か」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別日本文法講座 5 連体詞・助詞』, 7-49, 明治書院.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』, ひつじ書房.
- 丹羽哲也 (2006) 「「ての」の用法について」 藤田保幸・山崎誠 (編) 『複合辞研究の現在』, 221-234, 和泉書院.
- 丹羽哲也 (2010a) 「連体助詞「の」の用法記述のために」 『人文研究』 61, 81-111, 大阪市立大学大学院文学研究科.
- 丹羽哲也 (2010b) 「相対補充連体修飾の構造—準体節との対応—」 『日本語の研究』 6:4, 95-109, 日本語学会.
- 丹羽哲也 (2011) 「連体節と連体「の」との対応」 『文学史研究』 51, 44-58, 大阪市立大学国語国文学研究室.
- 野村剛史 (1993a) 「上代語のノとガについて (上)」 『國語國文』 62:2, 1-17, 京都大学文学部国語国文学研究室.
- 野村剛史 (1993b) 「上代語のノとガについて (下)」 『國語國文』 62:3, 30-49, 京都大学文学部国語国文学研究室.
- 野村剛史 (1993c) 「古代から中世の「の」と「が」」 『日本語学』 12:11, 23-33, 明治書院.
- 姫野昌子 (1983) 「動詞「て」形の連体修飾構造」 『日本語学校論集』 10, 25-43, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.

茂木俊伸・森篤嗣 (2006) 「テノ名詞句の意味と形式」『世界の日本語教育.日本語教育論集』 16, 139-153, 国際交流基金日本語事業部.

森野宗明 (1973) 「格助詞」鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別日本文法講座 9 助詞』, 107-141, 明治書院.

柳田征司 (1987) 「古文における連用格」山口明穂 (編) 『国文法講座第三巻』, 116-155, 明治書院.

山口堯二 (1980) 「て」「つつ」の表現性『古代接続法の研究』, 255-277, 明治書院.

山口堯二 (1998) 「中古語「て」連用句とその周辺」佐藤喜代治 (編) 『国語論究第 7 集中古語の研究』, 213-247, 明治書院.

山田敏弘 (2002) 「格助詞および複合格助詞の連体用法について」『岐阜大学国語国文学』 29, 27-43, 岐阜大学.

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』, 寶文館.

吉田光浩 (2016) 「古文解釈と助詞」中山緑朗・飯田晴巳 (監) 『品詞別学校文法講座第五巻助詞』, 180-203, 明治書院.

渡辺実 (1971) 『国語構文論』, 塙書房.

資料 1 資料ごとの用例数 (空欄は用例無し)

資料	歌	詞書	会話文	心内語文	地の文	その他	計
韻文資料	萬葉集	3				1(左注)	4
	古今和歌集	3	3				6
	後撰和歌集	2	4				6
	拾遺和歌集	3	2				5
	後拾遺和歌集	5	3				8
	金葉和歌集	4					4
	詞花和歌集		1				1
	千載和歌集	1	5				6
新古今和歌集	1	2				3	
散文資料	伊勢物語	1				1	2
	平中物語	1					1
	蜻蛉日記	1					1
	宇津保物語	1					1
	落窪物語					1	1
	枕草子				1		1
	源氏物語	2		7		3	12
	堤中納言物語			1			1
	更級日記			1			1
	夜の寢覚				1	1	2
	浜松中納言物語			2			2
	狭衣物語					2	2
	大鏡	2		5			7
栄花物語					7	7	
讃岐典侍日記					1	1	
計	30	20	16	2	16	1	85

資料2 「ての」に前接する形式の詳細（空欄は用例無し）

前接する形式		散文資料				韻文資料		計	
		会話文	心内話文	地の文	歌	歌	詞書		その他
①動詞単独形	流る	1	1		3	5		10	
	罷る						5	5	
	成る	1		1			2	4	
	上がる	4						4	
	濡る					3		3	
	生く	1	1		1			3	
	寄る			2				2	
	有る					1		2	
	飲む					2		2	
	置く					1		1	
	寝る					1		1	
	つく（自動詞）	1						1	
	咲く					1		1	
	絶ゆ				1			1	
	隔つ	1						1	
	死ぬ				1			1	
	覚ゆ	1						1	
	上る	1						1	
	立つ	1						1	
	果つ				1			1	
	つく（他動詞）				1			1	
	参る				1			1	
	ながらふ			1				1	
会ふ					1		1		
帰る						1	1		
なくなる						1	1		
別る					1		1		
入る					1		1		
散る					1		1		
出づ					1		1		
言ふ				1			1		
②名詞＋ず	物語す			1				1	
③動詞＋動詞	あひ見る				1	3		4	
	おくりをさむ						1	1	
	言ひ言ふ			1				1	
④動詞＋補助動詞	かくれ給ふ						2	2	
	くだり侍る						1	1	
	つき給ふ	1						1	
	賜はり給ふ	1						1	
	聞こえ給ふ			1				1	
	生き給ふ			1				1	
	おろし給ふ						1	1	
失せ給ふ				1			1		
生き出で給ふ				1			1		
⑤動詞＋助動詞＋補助動詞	かくれさせ給ふ						3	3	
	過させ給ふ	1						1	
	渡らせ給ふ			1				1	
	おろさせ給ふ					1		1	
	つかせ給ふ					1		1	
おりさせ給ふ					1		1		
⑥動詞＋動詞＋助動詞	語り聞こえさす			1				1	
⑦動詞＋動詞＋助動詞＋動詞	思ひ聞こえさせ給ふ			1				1	
⑧形容詞	若し	1						1	
計		16	2	16	8	22	20	1	85

資料3 「ての」に下接する形式の詳細（空欄は用例無し）

下接する形式	散文資料				韻文資料			計
	会話文	心内話文	地の文	歌	歌	詞書	その他	
後	1		1	3	15	1	1(左注)	22
世	5		1	1	3			10
頃	1		1			6		8
名			1	1	2			4
秋						3		3
年	1					2		3
ついで			3					3
果て果て	1		1					2
朝け						2		2
年の秋						2		2
又のとし						2		2
後の後の世					1			1
朝け						1		1
事			1					1
またの年の夏						1		1
けはひ	1							1
元年乙巳	1							1
物語	1							1
仏の国などに来にける にやあらむ		1						1
際	1							1
心ばせ人	1							1
人	1							1
たのめ				1				1
御宿世			1					1
ほど	1							1
床					1			1
あまり			1					1
御移香			1					1
花			1					1
程			1					1
十余日			1					1
よとせのはる					1			1
七月七日						1		1
身のなげき			1					1
濡れ衣		1						1
計	16	2	16	8	22	20	1	85

きくち そのみ／人文社会科学研究所

(2018年10月15日受理)